

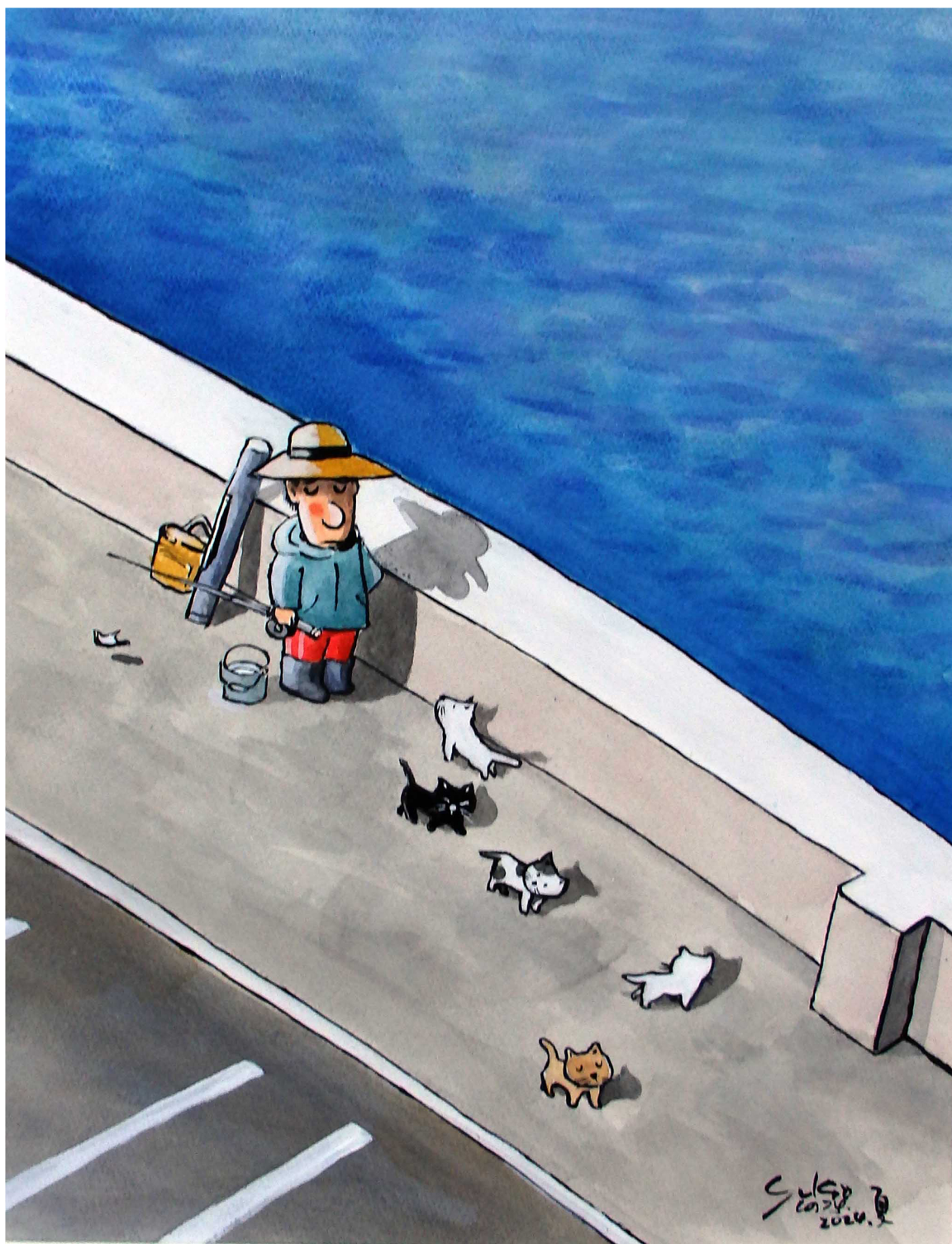
篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

うなだれる気分

ブラビの『リバー
ランドスル―イッ
ト』を見てフライ
フィッシングには
まったのは40代
の頃だった。

マンガ仲間と毎年釣り旅行に出かけていたが
管理釣り場ではそれなりの釣果があっても自
然溪流では寂しいものだった。
しかし、フライフィッシングとは元来そーい
うもので魚と戯れる楽しみが第一のいわゆる
キャッチアンドリリースが基本だったから、



釣った魚を持って帰る事は無かった。
だから大きなクーラーボックスなどを持って
行く事は無い。
しかし、家でその日の夕飯のおかずを家族が
待っているような釣り人にとっては、釣果の
無かった日の落ち込みは相当なものだろう。

おこぼれを期待して寄ってくる野良猫たちにも
馬鹿にされそうな気分になるに違いない
心なしか影がうな垂れて見える情景である。

光の元へ

夏になると毎年わが家の門灯の下にヤモリの親子が姿を見せる。それを見ながら今年もよろしくと声をかけるのは彼らがそこに集まる虫たちを獲ってくれるからである。

光に集まるのは虫だけでなく深夜のコンビニに集まる若者たちも連想させるのだが、今年のヤモリは一度姿を見せたきりで姿をみせなくなった。

今の家に越して来てから初めての出来事で、原因が分からずヤモリ一家に何か異変が起こったのかと心配になった。

そんなある日、知人から最近の縁日の照明はLEDを使うようになったから虫が寄ってこないのだという話を聞いてストンと腑に落ちた。

門灯の電球がよく切れるので今年の夏からLEDに変えていたのである。

エサとなる虫が寄ってこないからヤモリも場所を変えたのだらうと思う。

長年の同居人が突然いなくなった淋しさが残った。



プラネタリウムの初体験は小学校四年生ごろの遠足だったと思う。大阪四ツ橋にあった電気科学館は日本で初めてプラネタリウムが設置された所で、大阪府下の小学生にとっては必ず遠足で訪れる定番の施設だった。

このプラネタリウムの機械は巨大なアリのような姿で子供たちをしばし星空の世界に誘ってくれた。

しかし残念なことに座席について背もたれを倒し頭上の星空画面に見入

バットマンは現れないけど

っているうちにいつも睡魔に襲われる。ナビゲーターの男性の声と静かなバックミュージックがそれを後押しする。

映し出されるドームの天井にもっとドラマチックな演出があればと思うが、そういう事は起こらない。

ナビゲーターの解説が終わると同時に目が覚めて何事もなかったような顔をして会場を出るのである。

何だか損をしたような気分も残るがあの心地よさは特別だった。

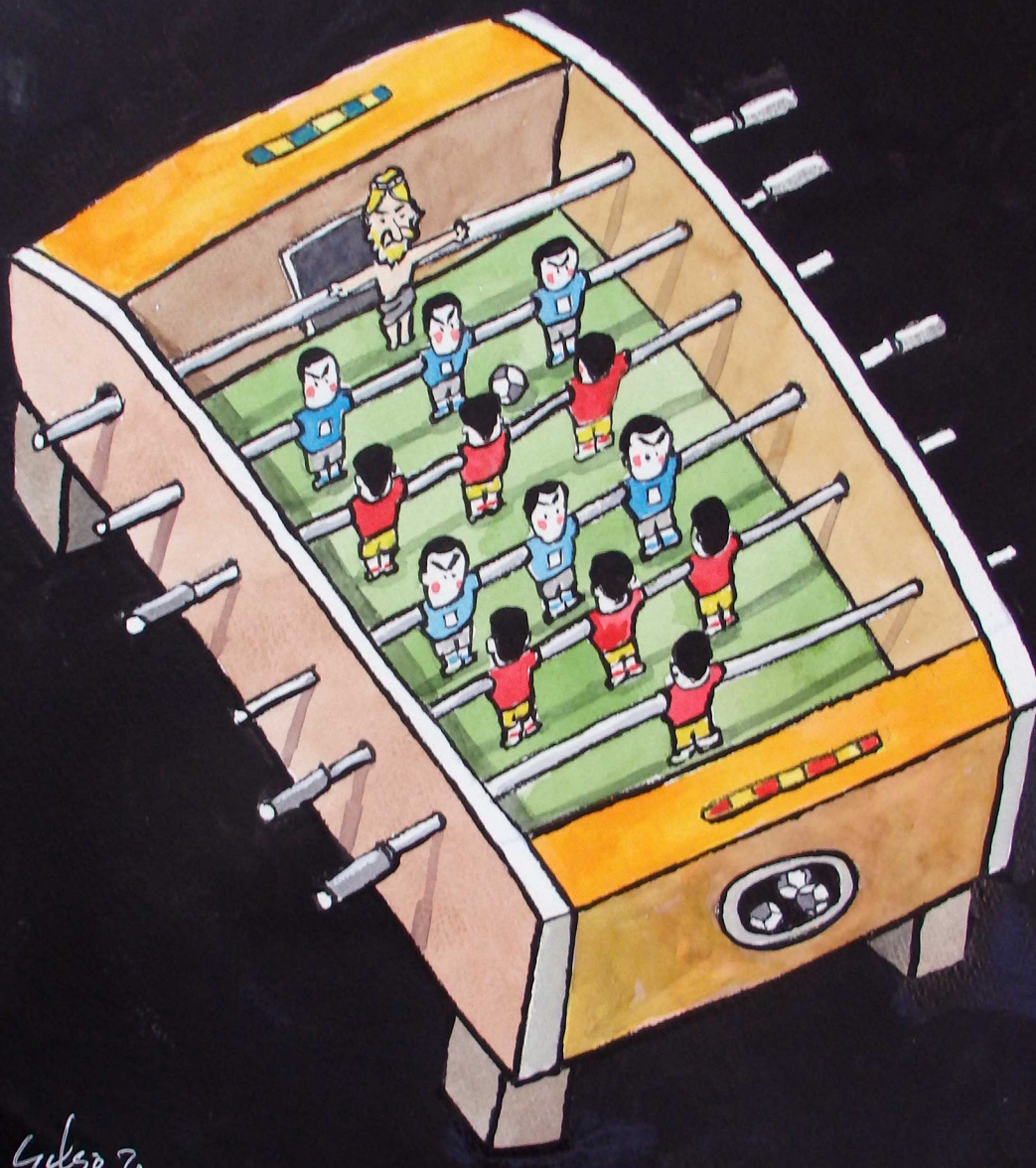




ボルダリング

「煙と何とかは高い所に登りたがる」と昔はよく言われたものだが『壁昇り』は今やオリンピックの競技にもなり、専用施設は街中のお洒落な複合ビルなどでもよく見られるようになった。同じように昔は危ない遊びだったものがスポーツとなって脚光を浴びる事も増えた。そそり立つ巨大な壁でも、ちょっとした凹凸を足がかりに登る事ができるという事に人生をダブらせる事もある。

守護神



団塊世代にとってエポック社の野球盤は昭和30年代のほとんどの家庭にあったのではないかと思うほど人気の玩具だった。しかしその頃にホッケーゲームというのがあったのをご存知の方は少ないだろう。遊び方はちょうど今のプラスチック製のサッカーゲームと同じだが少し大きめで合板

製のリンクに金属板の選手たちを立てて動かして遊ぶのである。昔からある海外のサッカーゲームは日本の物と対戦の方向も動かし方も随分違うのだ。今の私にはゲームするよりビリヤード台と同じようにインテリアとして魅力的な物に見えている。



死はある日突然に

人の寿命の長さはそれぞれで、これは実に不公平なものである。身体を鍛えているスポーツ選手や大富豪でも善行を積んでいる聖人のような人でも自分の寿命をコントロールすることはできない。

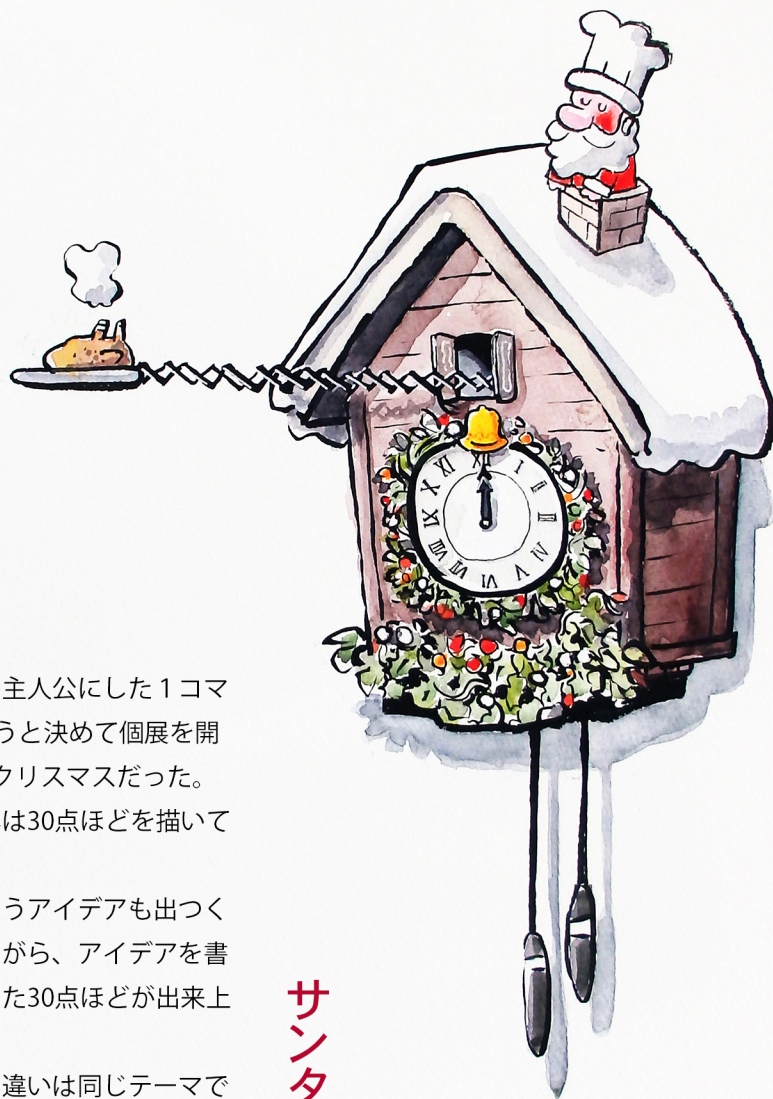
落語『死神』には人の寿命を1本のロウソクに例えて他人のロウソクをこっそり自分のものに取り替える場面が出てくるが、まさに言い得ていると感じるのはロウソクが燃え尽きる前に炎が一瞬明るく輝く時である。いつも年の暮れになると有名人の計報が増えるように感じるがこれは寒さによって血圧が上がるからと言われている。ヒートショックである。私の身内や知人にもそれで亡くなった人は何人もいて、寒い日の入浴時はいつもそれが頭に浮かぶ。

自分の歳に近い有名人の計報を見ると、今まで遠い先の話と感じていた『死』がとても身近なものになっているのを感じるようになった。

スマホの充電は電池容量が少なくなったらちゃんと警報で知らせてくれるがそれはあるのだろうか。

しかし人間には充電機能がないから知っても焦るだけか。

願わくばみんなが言うように苦しまず、寝込まず、ある日ポックリ眠るように逝けるようにと思うのだが、性格的にはちゃんと準備をしてその日を迎えるというのが合ってるかな。原稿の締め切りを破ったことのない僕としてはそれが一番落ち着く。



サンタクロースを主人公にした1コマ漫画を100点描こうと決めて個展を開いたのは5年前のクリスマスだった。それに続いて昨年は30点ほどを描いてこれも本にした。

さすがに今年はもうアイデアも出つくしたかなと思いながら、アイデアを書き出していくとまた30点ほどが出来上がった。

私はプロとアマの違いは同じテーマで100点描けるかどうかが基準だと思っているのだがサンタ漫画は今年で160点を越えたわけである。

もう出尽くしたかなと思っても時間を置くとオッ！というものが降りてくる。枕元に置いたアイデアノートには天から降りてきたアイデアがどっさり溜まっている。

サンタ漫画を描く

